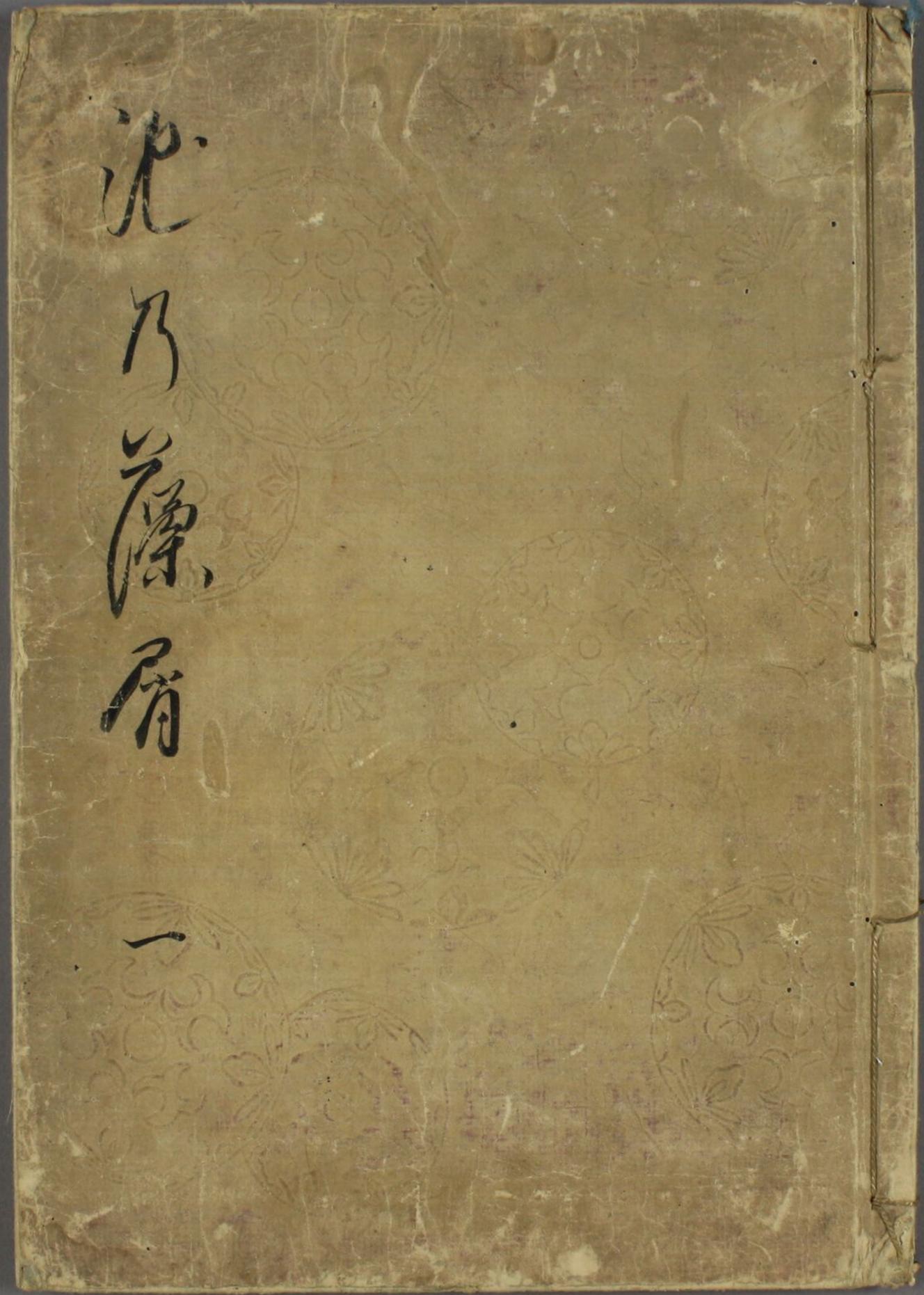
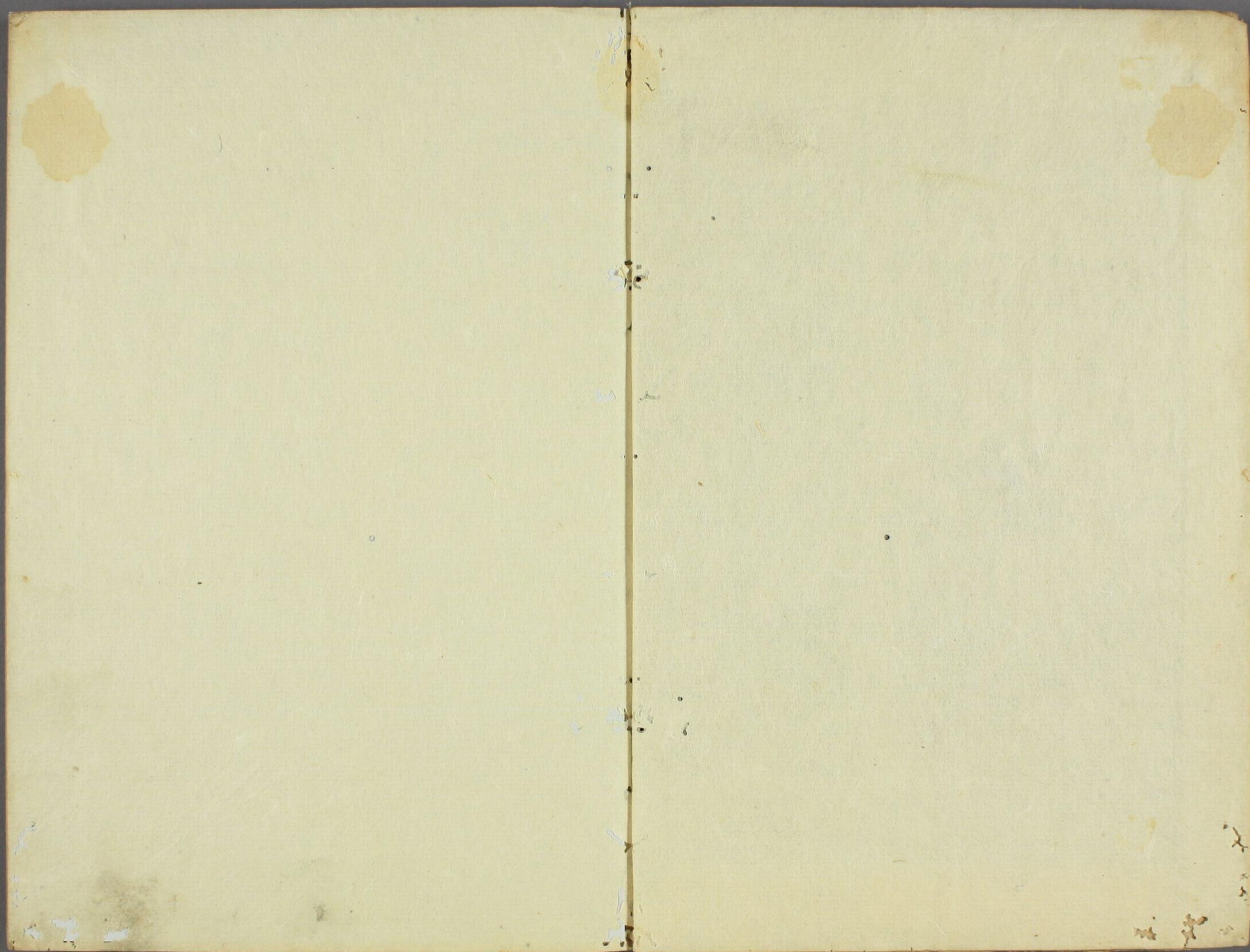




沈
乃
藻
眉

一





池藻屑序

文之體裁雖有區別記事之為難焉而事
有虛實記實最難焉何謂實也如歷代正
史是也何謂虛也如野史小說是也何以
謂實難也玄之謂玄黃之謂黃牝固不可
稱牡牡豈得呼牝乎巨細多寡長短遠近
生沒尊卑榮辱忻戚允事之與物定規在
彼不可變移而我就其中損益焉取捨焉
拘束牽掣雖有奇才難於馳驟矣野史小



說不然也。玄黃牝牡已無根據。凡事之與物任意結撰。唯務理義湊合。意境新巧也。於是乎辯博之後。假之發其學殖。逞其辭才。以故正史馬班之後。一解不及一解。而野史小說。輒近多稱精妙矣。由是思之。我邦著作。豈其不然乎。舍人親王鑒哉。史筆自是一時之選。雖有續紀。不啻退舍也。文德三代之錄。正統一覽之記。所謂辭達而已。亡論其國字。與不國字也。榮華成編。

脩辭相尚。可補史之闕。文空穗竹。取所謂齊諧志怪。枕艸紙詹。言不亢大和。獻志所裁。雖叢爾冊子。髣髴于臨川之筆。宇治著聞。野史先鞭。玉石並收。若論其詳。更僕奚罄。但紫氏六十帖。才識幻妙。體裁曲暢。可謂絕技矣。雖然。要之鏡花水月。如有如無。亦唯玄黃牝牡。任意結撰。若夫水鏡大鏡。今鏡增鏡。四部各引。據確實垂微。後昆惜乎。作者或失。又無繼者。今而始得。

焉豈可不奇歎激賞乎。繼者為誰。荒木田氏是也。荒木田氏伊勢人。其族為

宗廟祠職。幼而穎悟。婉婉聽從。無俟母訓。組經裁縫。百兩女工。無不精妙。而暇則好讀。吞史又學。和歌聯歌。既筭為慶德。如松室。如松亦好學博古。夫妻相得。日夜展玩。卷帙咀嚼。理義以為娛樂。人比諸趙明誠。李易安夫婦云。於是荒木田氏中饋之間。益從事于其所好。覽涉愈博。辭藻愈縟。乃

有著撰。積以歲月。無慮數十種。今所刻池藻屑亦其一耳。蓋增鏡紀載肇于元曆。訖于元弘。此卷乃接其武直。至於慶

長初中間二百七十八年。

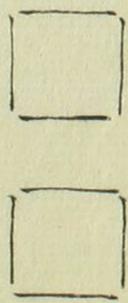
朝綱張弛。群下利鈍。以迨于諸藩逆順。南北紛爭。事跡無有遺脫。其文簡而明。其義典而實。得良史體。此文之所取難與彼玄黃牝牡。任意結撰者。殊有逕庭。况優柔之辭。婉縟之語。成于閨閣中者。予可謂四鏡。

之昏併此為五。豈可不奇歎激賞乎。然而
荒木田氏則反自卑謙不敢比諸古人著
作其所以名池藻屑取義於堀川後百首
中伊勢則可謂僻事之和歌云嗚呼四鏡
之昏雖曰紗撰惜乎作者或失今此池藻
屑流傳之久後或失作者姓氏猶四鏡耳
荒木田氏筆硯餘波及詞詩者請正於余
以故池藻屑之序余不得辭乃錄此昏荒
木田氏所著以贈之庶幾後來不失作者

云爾

安永甲午秋九月

北海江印綬撰



池乃云々此巻北第一



葉月のう海部平与んるる立お付ふ石山とあん
久う詣さうつれとほほいつるまを立さうける山
乃おをまらまうき福なきと祈うあ秋の事
しおさいひあつ物あふれま岩の海ありの流
身あんと浮世のあをまあれといまうまうけ也
ほくくとらあ海湖のあもをうらある浪乃
花うの好あうる遠きるまも又たらひあうらん
古くは京或部といつるま仕く源氏物語に
むらまは寺ま龍うは佛の形も長く
了八月あるとの月本湖うつれを

とくみあつたはらうしやまし多端もたなくいとらうらうあ。
日影の玉の御を光り致満し應あるしあつた
法よりくよはらまひを法をきよ花の縁をきまを縁
多きく神を法を縁をか入もよそのうくもよ
所よあつしと又法をわらう今年大内裡
ゆきましとと睦月うらうと始あり今年里
いと強つ望のしとふ法は新事の基のきま
うとわらうやと思ひ法は花のさうらあ
いと内ましととくしとく人のんものひら
たう色ハ善代かしてア法とあま又何する人
あまきまのあまのあまの法子の法をわらうあま
とと

ととあつたはらうしやまし多端もたなくいとらうらうあ。
日影の玉の御を光り致満し應あるしあつた
法よりくよはらまひを法をきよ花の縁をきまを縁
多きく神を法を縁をか入もよそのうくもよ
所よあつしとと睦月うらうと始あり今年里
ゆきましとと睦月うらうと始あり今年里
いと強つ望のしとふ法は新事の基のきま
うとわらうやと思ひ法は花のさうらあ
いと内ましととくしとく人のんものひら
たう色ハ善代かしてア法とあま又何する人
あまきまのあまのあまの法子の法をわらうあま
とと

あつらふらふさうでゆへに大内山の月影又い
うそとくつこのまぢれは涙よりきくもよめり
たう車をもと陣より家へ帰る家へ待一人
しつ山の家へなつて所へしつ其所へ出る
替ひひぬ内へおくとささかすもいふあたら
うとまひとまうつらぬひ世よりくぬらう
らまよと父の家へ居をちしはゆるはしつ
心をつらうしついとあまもいふもさう
あつらふらふさうでゆへに大内山の月影又い
るるくつ返車

何事 とう あり とう あり とう あり とう あり

そむきつ我世のまよひしつ六あつらふらふ
あつらふらふさうでゆへに大内山の月影又い
岩倉の坊においふらう家へなつて所へしつ
かつらふらふさうでゆへに大内山の月影又い
父をたいとまよひしつ六あつらふらふ
まよひしつ六あつらふらふ
まよひしつ六あつらふらふ

何事 とう あり とう あり とう あり とう あり
あつらふらふさうでゆへに大内山の月影又い
あつらふらふさうでゆへに大内山の月影又い
あつらふらふさうでゆへに大内山の月影又い
あつらふらふさうでゆへに大内山の月影又い

多しありの愛おしき人なりとて
いささかきりこころをいささか
友もいささかきりこころをいさ
茶もいささかきりこころをいさ
もいささかきりこころをいさ
いささかきりこころをいさ
のちむしあつたうらむるも
城まふしあつたうらむるも
世もいささかきりこころをい

池乃藤原巻之二

光嚴院



九十六代にありてせぬつるに佛
後伏見院の一の皇子のては
て公卿の大長の子に
とありてありてありてありて
おはすまゝにありてありてあり
まゝにありてありてありてあり
やゝにありてありてありてあり
うらむるにありてありてありて

10
11
12

